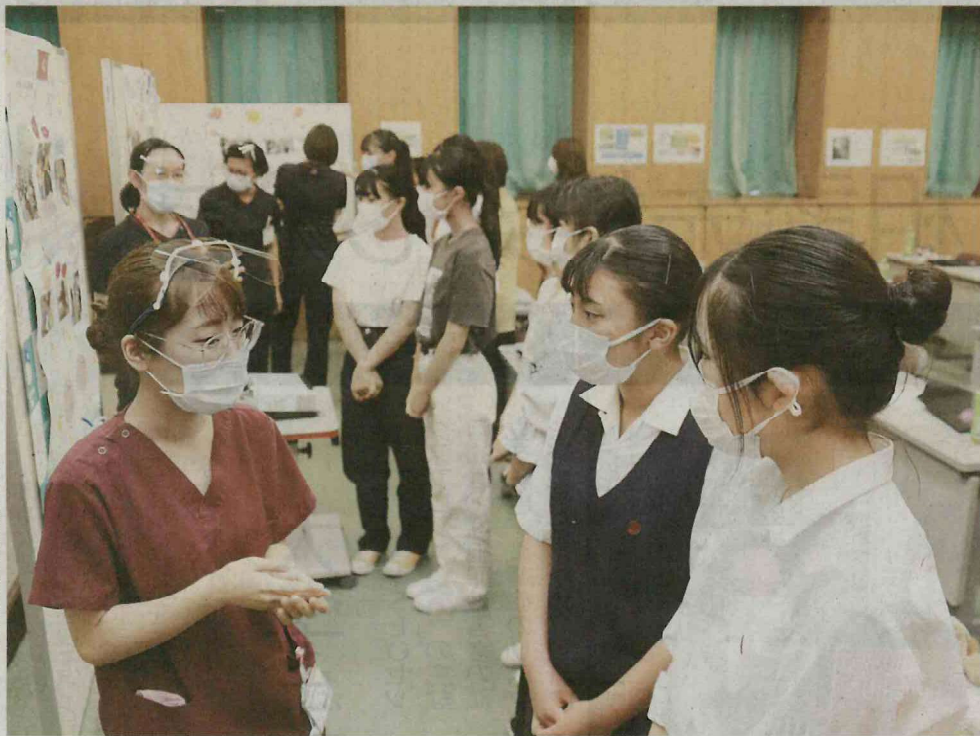


中高生のキャリア教育に対する関心の高まりから、県内で夏休み期間に開催された各種の仕事体験イベントや大学の研究体験会などが例年以上に人気を集めた。背景にはコロナ禍で2年ぶりの開催だったことに加え、校外での体験の場などが減ったという事情がある。感染収束が見通せず、将来への不安からキャリア設計を早い時期に決めたいという中高生が増えていると、受け入れ現場はニーズの高まりを実感している。



医療従事者に話を聞く生徒たち 8月中旬、藤枝市総合病院

職場体験 高い関心

県内2年ぶり開催、応募殺到

中高生、将来設計に意欲

藤枝市立総合病院が開催した「福祉のしごと」

中高生を対象に開いた職場説明会は定員60人に140人が申し込み、開催回数を増やした。8月中旬の説明会では多くの生徒が終了後、各分野の医療従事者に熱心に質問した。高校3年の小倉沙織さん(18)は「これで進路を決めることができると安心した様子。達家好美看護部長は「生徒は現場に触れる機会がなく困っていただろう。感染対策と両立できる最大限の体験を提供しようと計画を練った」と説明した。県社会福祉人材センターが県内3カ所で開催した「福祉のしごとと学び体験ツアー」も定員60人を上回る81人が申し込む人気ぶり。大学の研究体験でも、県立大(同市駿河区)の薬学部が開いた「ファーマカレッジ」の応募倍率は7倍。3密回避で定員を減らした影響もあるが、応募者数は例年より多

かった。愛知淑徳大の加藤智准教授(文部科学省教科調査官)によると、1998年に総合的な学習の時間が始まったことを契機に、児童生徒が地域の多様な大人に学ぶ機会が増えた。最近の教育現場は小学校段階から、働くことと肩を高く「このコロナ禍を受け、将来をどう生きるかという関心が、生徒の行動に結び付いているのかもしれない」とみる。

一方、感染急拡大を受けた緊急事態宣言で、夏休み終盤の行事は相次いで中止になった。医療機関の職場体験に参加できなかった中3の女子生徒は「志望校が三つほどあり、仕事に触れて決めようと思っていた」と肩を

コロナ禍を越えて

落として、不安が感染拡大をさらに広げている

コロナ禍で

不安が感染拡大をさらに広げている